

本格的な春が来るとさらに忙しくなる。畑の準備が始まるのだ。畑といっても前にも書いたようにささやかなもののだが、老人二人にはそれなりに大変なのだ。まず土なのだが、毎年少しずつMさんに土を分けてもらって畑に足しているのだが、それでも軽のダンブ二杯分くらいはいつも持つて来てくれるので、それを土置き場まで一輪車で運び、必要に応じて畑などに使わせてもらっている。それに、落ち葉でつくった腐葉土や、妻が頑張つて土間でお世話しているダンボールコンポストの堆肥、それに秋のうちに刈つて集めておいたそらの草、それに必要に応じて石灰や肥料を土地と混ぜてなじませておかなければならない。二人とも素人なので、図書館で本を借りてきてはいろいろ試してみる。妻が借りてきた本が「ぐうたら農法」みたいなタイトルで良い選択眼をしている。

今年は何を植えようかと考えるのは楽しい。あれこれ植えてみたくなるのだが実際にうまく育つて日々使えるものは限られる。それでも、少しずつではあるが二十種類ぐらいは毎年育てている。ハーブの類は宿根のものが多いため毎年植えるものはさらに少ない。種から育てる計画性はあまりないので、大半は苗を買ってくる。近郊の農家では一株五十円とか格安で売ってくれるところがあったりするのでなおさら苗に頼ることになる。それぞれの植物に適した土や水はけの状態、気温や地温などあるようだが、まだ、そこまで気を配って育てるレベルにはなっていないので、私たちに買われた苗は可哀想かもしれないのだが。

先に春の兆しは二月頃からと書いたが、野菜の苗を植えるのはもつと気温が高くなってからでなければならぬ。そのタイミングが今だに良くわからない。地温を高く保つのにマルチという黒いビニールで土を覆う方法があるが、私たちは農家ではないので、毎年、沢山のビニールをゴミとして廃棄するには抵抗があり今のところ使っていない。そのかわり大量に生えているススキを細かく切つて土の上にかけるといふことなどしているが、若葉が大好きな虫の良い寝ぐらになつたりして効果があるのか無いかわからない。ここ北国ではカッターが鳴くと豆や苗を植えるタイミングと言われているらしいが、ここに来てからの記録を見返すと五月の十九日が一回、二十日が二回、二十四日が二回とだいたい同じ頃に鳴いている。不思議なものだ。

そんな素人の畑仕事も一段落する六月の中旬になると、いろいろな草花の花が顔を出し始める。六月の下旬になると、敷地は新しい緑に覆われるので、外かまどが活躍し始める。枯れ草が目立つ内は火気厳禁なのだ。枯れ草に火がついた時の燃え広がる勢いは凄まじいそうで、そんなことになったら大変である。外かまどの出番はこの春の時期と秋に限られる。あの暑い夏にかまどの温度を三、四百度に上げるために、炎天下に薪の燃える輻射熱を浴び続けるのは苦行に等しい。七月に入るやいなや、暑いと感じる日がやってくる。北国にも夏が訪れる。

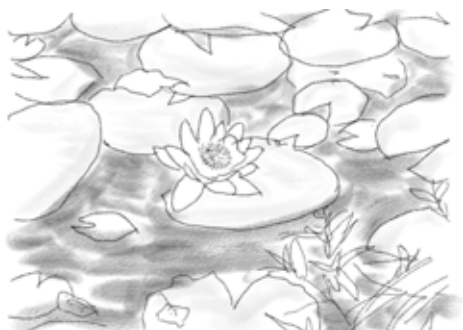


七月になって夏が来たと実感するのは、お隣のご主人が釣ってくる天然の鮎だ。そう、私たちが竹山に住むのを後押ししたあの鮎だ。ご主人は相当、腕が良いようで坊主だった年は無い。それどころか七月に何度もあの香りをいただけるのだからありがたいことだ。今年は、大雨で型の良い鮎が相当流れ、かろうじて止まった鮎も食料になる藻が強い流れで剥がされ育ちが悪いとぼやいておられたが、それでもきちんと釣果を上げて来られた。近年の記録的な大雨は多大な被害をもたらしているが、生き物の生態にも影響が出ているのかもしれない。

夏になると色とりどりの花が咲き始めるのだが、特に嬉しいのは自分で掘った池に植えたスイレンの花が咲くのが見られることだ。スイレンは最初の年に植えた小型のスイレンのヒツジグサの他に、Mさんが庭じまいを頼まれた家から救出して来た大型のスイレンも仲間に入れていただき、大小、白、クリーム、赤、オレンジなど色とりどりのスイレンの花の共演が見られる。スイレンは早朝は蕾の状態だが、それから数時間の間に花が開き立派な姿になる。じいっと見ていると徐々に開いて来ているのが見えるような気がするぐらいだ。それが夕方が近づいてくるとあつという間に閉じてしまう。同じ花が三日と咲いていないのではないだろうか。

七月は子供たちと会える月でもある。早朝に近くの道を車で走っていると大きな鹿が現れ、その後ろには小さな鹿の姿も見えた。母子だったと思われる。親鹿はじつとこちらを見て私たちが通り過ぎるのを確認し、子供を促しながら道を渡って行った。母子といえば、前にも書いたが我が家の池を手洗いの練習の場に使ったアライグマの家族を見たのも七月だった。

親がつきつきりで面倒を見れば良いのだが、そうはいかない子供たちもいる。おそらく鳥たちがそうではないかと思う。妻は良くアカゲラが親子で来ていて、ヒヨドリが兄弟で来ているというが、そう思い込んでいただけで見分けているわけではなさそうだ。むしろ一人で木々の間を自由に飛び回るようになった喜びを爆発させているような危なっかしい子供の方が気になる。その飛び方は車を手に入れたティーンエージャーのようで、「どうだ、俺こんな飛び方できるんだぜー」と言っているようだ。そして、案の定、家の窓に激突する。ドンと鈍い音が聞こえるたびに妻と顔を見合わせ、急いで外に出て窓の周りを確認する。幸いにして姿を見ることはほとんど稀なのだが、窓ガラスに一枚羽根が残っていたりすると心が痛む。それでも数回、鳥の姿を見ることがあった。少し体を動かしているので大事にはなっていないことがわかるのだが、それでもすぐには飛び立てないでしばしばーっとしている。そのうち首を傾けてみたり羽を少し動かしてみたりして、少々きこちなく羽ばたき近くの木に移動する。またそこでしばらく体調が回復するのを待ってそれから飛び去るのだ。その間は見守るしか無い。そのようなことも大小の窓に簾を垂らしてからは無くなり少し安らかに七月を迎えられるようになった。



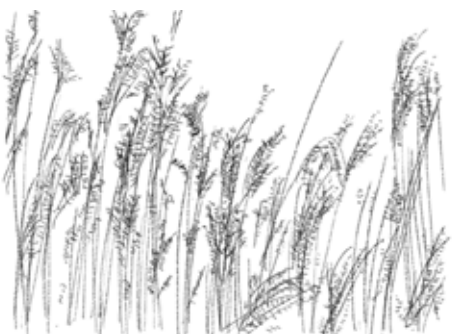
第七十一回 春から夏そして秋 (三)

八月になると合唱の季節になる。セミとカエルだ。セミは実はもっと早く五月頃に鳴き始めるエゾハルゼミというのがいる。ミイキンと長めに引っ張って鳴くのが特徴で夏のアブラゼミほど騒がしくない。私たちにはアブラゼミは気象予報士のような存在で、朝は涼しいなと思っけていてもジージジジと一斉に鳴き始めると、ほどなく強烈な暑さがやってくる。という気がしている。カエルも春先にゲロゲロとドスの聞いた声で鳴くのもいるが、夏のはもう少し軽くゲコゲコと鳴く。彼らも気象予報士で、ゲコゲコとくるとほどなく雨が振り始める。ような気がする。

畑の収穫もこの頃が盛りになる。食卓もそれに合わせて豊かになる。朝はサングラをつっかけて自家製のヨーグルトに添えるイチゴとブルーベリーを採ってくる。朝早く収穫したものは水々しい。それにミントを加えると目も美味しくなる。フェネルも意外と合う。朝採ってくるのは他にトマトとバジルがある。たつぷりのオリーブオイルにニンニクを刻んで入れてオリーブの香りとニンニクの香りが立ち始めたらたつぷりの刻んだトマトを加えると乳化してとりとする。それに昨夜の冷やご飯を加えてリゾット風に。最後に刻んだバジルと加えると完璧だ。新じゃがもこの季節。皮が柔らかいので茹でてそのまま食べる。と土の香りがする。キュウリも取り立ては包丁を入れると水がしたたる。キュウりを生のまま食べるとその水気で心なしか体がひんやりする。ナス、インゲン、カボチャなど、毎日、畑をのぞいて今日の料理を思い浮かべることが出来るのはこの季節の楽しみだ。そして、ご近所からのお裾分けの野菜が急に増えるのもこの頃だ。

八月はススキなどが背丈より高くなり、敷地のなかに確保した園路も草を掻き分けて行かなければならなくなる。なので、この頃の敷地の変化は意外と見落としている可能性がある。それでもはいろいろな植物がタネを蒔く準備に入るのはわかる。タネを蒔くタイミングは春から秋までそれぞれが他との競合を避けるようにバラバラなのだが、この頃、準備に入るのはススキやガマやアブラガヤが目立つ。単純に背が高いから園路を歩かなくてもわかるとうだけなのだが。ススキはうつつすら紫色をした穂がで始める。それが九月になれば綿毛をつけて白い穂になりいやが上にも秋を演出するのだ。ガマも独特の深い茶色の穂が目立つのだが、やがてそれもほころびができてそこから綿毛のついたタネを飛ばす様になる。アブラガヤは先端に茶色の穂をつける。その茶色い色と名前からして穂をすりつぶすと油が取れそうに思うが残念ながらそうでは無いようだ。背が高くて目立つといえばセイタカアワダチソウもそうだ。ただ、この頃はまだ蕾ができた頃で黄色い花が目立ち始めるのはもう少し先になる。

暑い日が続く夏バテ気味になるのだが、それでも、畑の向こうに青々と広がる草はらにススキの紫色やアブラガヤの茶色が刷毛で引いた様に浮かび始める景色をみていると、確実に季節は秋に向かって変わりつつあることがわかる。



九月に入ると秋のキノコの季節になる。我が家の敷地で収穫できるのは限られているが、それでもタマゴタケ、ヤナギタケなどは毎年、食卓に季節を運んでくれる。ただ、キノコはタイムリングを逃すとナメクジに先に食べられてしまう。この頃になると散歩と称して先手を打って目星をつけた場所や木を見て歩くのが日課になる。キノコが大好きなのはナメクジだけでは無い。スーパーで売っている栽培したキノコはそのまま調理できるが、自然に生えたキノコはしばしば水につけておく必要がある。そうするとキノコのヒダの奥から小さな虫がうじゃうじゃ出てくる。これを見ると一瞬、食欲が後退するが酒のあてのことを思うと見なかつた気持ちになる。この頃になると、いろいろ気をかけていただいているMさんも、どこからか採って来たヒラタケやタモギタケなどをどっさり持って来てくれる。それも夕方に突然電話が掛かってきて「石塚さんヒラタケ食べないかい。」と言って持って来てくれる。この突然のプレゼントはいつも嬉しい。

この頃にはノギクが咲き始める。ノギクは大きなコロニーをつくっているのが花畑のようになる。花の色も白が多いが、鮮やかな紫色や赤色も混じって賑やかだ。ノギクに負けじとセイタカアワダチソウも黄色の花が開き始める。ハンゴンソウも同じく少し大きめの黄色の花を咲かせる。セイタカアワダチソウもハンゴンソウもコロニーをつくっているが、園路の両側に陣取っていて競い合って咲いている。

九月といえば竹山神社祭が行われる月だ。第三日曜日と決まっっていて町内の人たちで境内を掃除し、お参りをする。昔は人出も多かったと聞くが、今は十数人程度が参加する程度だ。お参りし、その後、地区の会館に集まり小宴を催す。小宴といってもここ数年はコロナ禍でお茶とお菓子程度で済ませているが、それでも互いに近況をのんびり語り合う時間は貴重だ。集まるのはほとんど七、八十代なので、元気な顔を見れるのも嬉しい。最近の話題は、夏の暑さと秋の大雨のことで、今まであまりこんなことがなかったという。

十月、十一月と周りの景色もどんどん変わってくる。ヤチダモは、うちの敷地の中では葉を茂らせるのが一番遅いが、黄色に色づき落葉し始めるのも早い。この頃の空はパツと抜けたような青空が広がり大きく見える。十月も中旬になるとグツと冷え込む日もある。そんな朝は土間の薪ストーブに火をつけて湯を沸かしコーヒーを入れる。暖かいコーヒーが喉を通り過ぎお腹に収まる感覚を楽しみながらオレンジ色の炎を見ているのは気持ち落ち着く。冷え込む日に合わせて木々も紅色や黄色に一気に変わってくる。秋の澄んだ日差しを逆光に透かして見るヤマモミジの紅色は心までしみてくる。イタヤカエデも黄色も加わりそれらが道を埋め尽くす景色は絵に描いたようだ。

紅色や黄色の落ち葉に見とれてばかりはいられない。また今年も冬を迎える準備を始めなければならぬ。初雪は年によってかなり差がある。ここに来て一番早かったのが十月二十一日で最も遅かったのは十一月二十三日だった。

